

自決のすすめ——良心をもつすべての関係者に告ぐ

Greatchain

December 23, 2022

「自決」には2つの意味がある。1つは自殺、もう1つは、他人の命令や干渉に惑わされず、自分の判断で出处進退を決めることである。どちらを取ってもよい。(良心の重荷に耐えられなければ、自殺もよろしい。)

私が自決をすすめるのは、自分あるいは自分の属するグループが、言論、活動、政策などにおいて、悪に加担しているという自覚をもっている人々に対してである。そこまではっきりした自覚はなくても、自分は人殺しをしているのか、人助けをしているのかよく分からん、という人が多いはずである。そういう人に自決をすすめる。

ケネディ大統領が、暗殺される直前に、新聞記者たちに言った言葉がある：——私の身辺には、陰で画策する秘密結社のような者たちがいる。「秘密」をもつというだけで、これほど嫌なものはない。私は私の在任中に、こういうものを一掃するつもりだから、諸君に協力していただきたい。(そのころまだ新聞記者は信頼されていた。) そう言って間もなく、彼は殺された。

そのとき、オズワルドという人物が犯人だとされたが、それは、そうでなかったことが明かになっている。彼はいわゆる「スケープゴート」(他者の罪を背負って死ぬ者)であった。安倍暗殺事件でもそれが囁かれている。その真相はまだわからない。しかし、「わからなければ、わかったことにして先へ進もう。それは穏便に願いたい」というわけにはいかない。少なくともこんな場合、潔癖な JFK は、そんな**秘密**には我慢できなかった。当時の記者も、**秘密大好き**の今の記者とは違っていた。

そこで一例として、**非常に申し上げにくい**ことを言うことにする。「ケムトレール」と言われるものがある。これは数十年も我々の頭上に撒かれたまま、なぜかこれを怖れて、誰も公然と口にしないという、不思議なものである。これは昔から「座敷に上がり込んだ象」と言われるほど、誰の目にも明らかで、ホピ族には「終末になると空に蜘蛛の巣が張るだろう」と予言されたほど、有名なものである。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/140130.pdf> しかし大多数の人が、これを本当に知らないか、または知らないことにしている。それは公然の**秘密**となっている。気象予

報士でこれを口にした人は一人もいない。しかしアメリカでは、かなり昔、「こんな本当のことを言えない予報士の仕事はできない」と言って、辞めた人がいる。

わが国の予報士も、抗議のために辞めるべきである。そうでないといつまでたっても、真実が伝わらないことになる。**あなたは自決せよ**。なぜ、そんな酷なことを言うか？ それは今、この種のことが日本中で平然と行われているからである。本当のことが何ひとつ言えない新聞記者は、**全員自決せよ**。少なくとも、トランプ前大統領に、「お前はフェイク・ニュースだ」と言われ、そのトランプを陥れようとし、バイデンの当選に、何の疑問も疑惑もないかのように報道するような者たちは、**全員自決せよ**。

これは科学者一般についても言える。特定の生物研究者、とくに微生物学者などが、急に羽振りがよくなるというような話は、昔からよく聞いている。これは今では、ワクチン関係にも多いであろう。微生物もワクチンも、今は公然と「**秘密兵器**」になっている。

今、世界を支配している隠れた権威者たちは、ルシファー信者であって、平気で人の命を奪うことのできる者たちである。「そんな者がいるはずがない」などと、勝手な推論をしないでいただきたい。スヴァーリ（偽名）という女性をご存知か？ 彼女は自分の育ったイルミナティ家庭の恐ろしさ、異様さを、大胆に暴露している。（Svali を検索すれば、私の翻訳分はすべて出てくると思う。）この聡明で大胆な女性の功績は大きい。特に、わずか12歳でありながら見込まれて、ヴァチカンの幼児生贖の現場に立ち会わされ、最後に誓った命令が「New World Order を死守せよ」だったという手記は、必読である。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/160122.pdf> 我々は、こういう異常な人々を、いわば家父長制の「父・権威者」、**秘密**の偉い人として、それとは知らずに受け入れているのである。ジョージ・オーウェルの小説『1984』は、恐ろしいほど見事な予言だった。

少し前、ドイツに、ウドー・ウルフコッテ (Udo Ulfkotte) という優秀な新聞記者がいた。あるとき CIA の局員がやってきて、「今からは、我々があなたに送る社説だけを、あなたの新聞に独訳して載せてほしい。それだけでよい、謝礼は十分にします」と持ち掛けられ、彼は他にもそういう例が多いことを知っていて、この奸計に乗った。彼は豊かになり、おまけにアメリカの名誉市民としておだてられ、有名人となった。しかし彼は良心の呵責に耐えられず、ついにすべてを告白し、自分を処断する本を出版した。やがて彼は病死したが、これは自殺とも暗殺とも解釈できる。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/170807.pdf>

「これはヨーロッパの話だろう、日本でそんなことはありえない」などと言う人がいたら、それは間違っている。なぜなら、日本を含む西側諸国のすべてが、CIA（のモッキング・ボード報道）に従うように、強制されているからである。これは周知のことであるのに、マ

メディアは、我々が知らないと思っているらしい。私は日本の主流メディアの中から、ウルフコッテのような、わが身を顧みない英雄が出てくることを待望しているが、真実の暴露がここまで露骨になれば（もはや敵は敵の体をなしていない）、転換すなわち革命は、案外、簡単ではないかと思う。こんな異常事態が長く続くわけがないからである。

我々はどんなものでも、あるものと取り組んでいて、心が晴々することと、しないことがある。収入はあり、人からも信頼されているのだが、何か晴々しないという場合には、自分をごまかして生きているのであろう。そんな時は、思い切って辞めるべきであろう。それが時代的な要請であることは、突然、これまでの仕事をやめて、全く別の仕事を始める人が多いことからわかる。彼らは自分の居場所を間違えていたのであろう。居場所は空間ではない。

斎藤一人さんは、魂と肉体の主従関係が、今、変わりつつあるのだと言った。多くの人が今、同じことを言っている。我々はいまだ最近まで、肉体が主人で、魂はそれに従っていると考えてきた。霊肉を反対にする見方には、まだ抵抗を感じず。なぜならこれは、実は、人間始まって以来の大転換だからである。しかし今、この歴史を覆す大転換が、何ものかに導かれて、徐々に動き出したように感じずのも事実である。そしてもし、この大転換が、魂に正当な主導権を与えるものなら、**勝者と敗者の概念**が、全く変わってくることになる。

私はこれを、信長をモデルにして考えると、考えやすいようにと思う。信長は周知のとおり、典型的な無神論者で、人を殺すことに何の躊躇も見せないだけでなく、宗教的な聖地である比叡山を焼き払い、墓石を壊して敷石に使い、石山本願寺を敵として戦った。彼の理屈から言えば、こんなものを怖れるようでは、天下統一の資格はないということであろう。しかし今、所を入れ替えた霊肉の関係が真理だとすれば、彼は完全な敗北者として終わるしかなかったことになる。これに対し、少なくとも「欣求浄土厭離穢土」を旗印とする家康などは、完全な勝利者ではないとしても、敗北者にはならなかった。

ルシファーを中心として結束する、現在のエリート・グローバリストも、子どもを殺したり、人を騙し裏切ったりすることに、良心の痛みを感じずるようでは、世界を征服することなどできない、という信念のもとに活動している。彼らは神を最も恐れるが、それは神を**畏れる**のではなく、神を敵とするルシファーに、付き従っているからである。彼らの究極の目標は、神と人間の息の根を止めることである。彼らの完成人間としての資格試験には、残虐さと狡知、卑劣、それに神と人間についての性的常識の破壊が入っている。**我々の指導者層**は、これらのことを考えて行動していただきたい。どうか我々と、我々の子や孫を、地獄に導くことのないようお願いしたい。